

郷土にのこる明治・

大正頃の文章は多く男性が書いたもので、女性のそれは極めて少ない。そこで今回は、「離郷の夕」と題する女性の文章を紹介する。作者は、郡市を通じて当代一流の女性知識人といわれた高松田瀬（一八八四～一九六八・雅号は村雨女史）である。

この文章は、文題が示す通り、東都遊学のため、家族と離れて他郷で暮らすことになる作者が、飯田を離れる前夜の思いを述べたものである。時期は、日露戦争前後の初秋と思われる。

吹くや、うら寒き風
越山の山おろし、梧桐
一葉いつの間にかちり
そめて、桜の黄葉わくらばちり
まどふ 秋の初めの哀
れさは、有情の身こそ
一しほなれや。

声に出して読みたい郷土の 近代文学（三） 鎌倉貞男

今日限り、明日より

はまとはねばならぬ旅
衣、行かねばならぬ他
郷の空、あ、天涯の孤
客ぞや。明日と思へば
今更に、聞ゆるもの、
哀れにて、目に入るも
の、懐かしく、まづさ
きだつは、時雨る、空

のそれよりも、袂のぬ
る、を如何いかにせん。：

…あ、如何にしてこ
の世をば、如何にして
か進まんと、思い悶え
て六夜むよばかり、机によ
りて其のまゝに、深き
悩みにやせし折り、眞
の血あり涙ある、父が
書簡の短くて、墨くろ
くると意味深く、にぢ

みし筆のあともある、
母が情の文三尋みひろ。抱き
か、へて嬉しさに、人
なき木陰に走り行き、
ひたなきに泣きにし事
もありけるよ。：

にも知るか夕時雨、名
にもちぎるか村雨の、
袖にかゝりて一しほ
に、誘はれがちの重き

まぶたのつゆの玉。：
名残り一夜の故郷に、
朝夕むつびし文机ふづくえに、
別れて行かんいざさら
ば。：（羽生永明編著
『南信文学』所載）

かなりの長文なの
で、その一部を引用
した。時雨降る秋の
夕べ、離郷の思いに
涙する女史の姿が彷彿
とされる。

文章は、和語と七五
調を多用した美文調の
文語文である。詩的で、
リズム感のある文章で
ある。一般的に、女性
の修学や社会進出が難
しかった時代、郷土に
こうした文章を書く女

性もいたのである。

た。

作者田瀬について
は、飯田市伝馬町の慈
光幼稚園が、昨年の創
立百周年を機に発行し
た『慈光』に詳しい。
女史は、善勝寺二十四
代住職高松鶴丸の長女
に生まれ、長じて府立
京都高等女学校を経
て、日本女子大学国文
科に学んだ才媛であ
る。帰郷後、飯田高等
女学校に三年間勤務の
後、大正三年、慈光幼
稚園初代園長に就任し

当時の幼稚園普及状
況は極めて低かった。
前書によれば、小学校
第一学年入学者中で幼
稚園教育修了者の占め
る率は、全国平均で2
パーセントだったとい
う。ちなみに、同期期
の長野県のそれは0.7パ
ーセントであった。女
史はまさに就学前教
育・幼稚園教育の先覚
者・先駆者であった。
（故人敬称略）



高松田瀬（『慈光幼稚園百年史』より）